

高野山真言宗 備中霊場第四十八番
萬壽山報恩寺 寶幢院

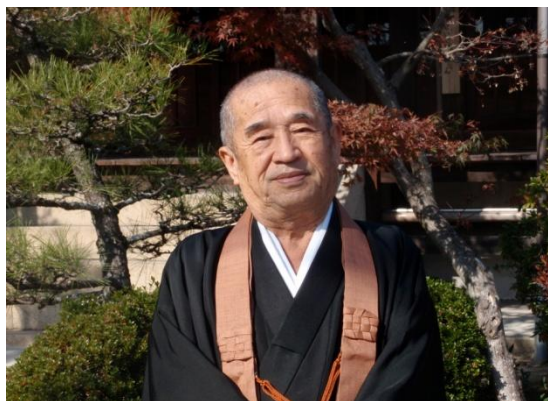


平成23年5月 正御影供記念

本尊 阿弥陀如来
開基 天平勝宝年間(749～757年)報恩大師
中興 永享年間(1429～1440年)後鳥羽帝の
後裔宣深僧正

住所：〒710-0012岡山県倉敷市鳥羽390
電話：086-462-2346

名誉住職：大畠晋道(第39世)



住職：大畠博道(第40世)



年中行事： 毎月25日 本尊講
 10月1日 過去帳供養
 春秋年2回(5,11月頃) 寛政四国巡礼(有志)

正御影供(しょうみえく、俗称“めいく”)： 9年に一度。今回は平成23年5月7日。

表紙の仁王門の額「萬壽山」は有名な寂巖によって書かれている。

寂巖(1702-71)：江戸時代中期のころ起こった悉曇(しったん)学の学僧。畿内を遊学した後、長年宝島寺(倉敷市連島)住職を勤めた。書家としても著名で、良寛、明月、慈雲とともに近世の「四大書僧」と呼ばれた。

住職退任挨拶

壇家皆様には、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は当山寺門外護にご協力下さり、厚く御礼申し上げます。この度、長男博道(はくどう)が宝幢院総代様各位のご賛同をいただき、宝幢院住職を本山に申し込み、平成22年8月25日住職辞令を拝受致しました。

私は昭和39年から50年たらず当山住職を務めさせていただきました。本当に種々(いろいろ)とございましたが、後任住職を生前中に迎えることができ、宝幢院ご本尊様に対して何よりの廻向と感謝しております。新住職はまだまだ未熟でございますが、今後ともよろしくご指導下さいませ。永い間ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

合掌

平成22年10月吉日

宝幢院 名誉住職(第39世) 大畠 晋道

住職就任挨拶

平成22年9月10日、高野山真言宗総本山金剛峰寺において行われました法流稟承と住職辞令親授式に出席しました。「法流稟承」とは、一寺を預かる住職として、一人ずつ改めて真言宗の印と真言を授かる儀式です。薄暗く荘厳な本堂で、松長有慶官長猊下より直々に法を授けて頂き、改めて身の引き締まる思いが致しました。また、辞令親授式におきましては、猊下より「真言行者たるもの、毎日の瑜伽の行を怠ってはならない」という訓辞をいただき、なかなかおぼつかないながらも、毎朝自坊の本堂にて行法を勤めております。

私は大学卒業後15年間中学校の教員を勤めておりましたが、37歳の時に決心して退職し、高野山専修学院で1年間修行して参りました。教える立場から、全く未知の事を教わる立場になり、毎日のように年下の教官に叱られながらも、とても新鮮で楽しく、少し気恥ずかしい思いがしたのを覚えています。厳しくも充実した1年間でありましたが、物覚えが悪く、正座が苦手で足の心配ばかりしていた私にとりましては、なかなか1年間で一人前の僧侶としての技量を身につけることは難しかったように思います。自坊に戻って4年の月日が経ち、そして今回住職としての辞令をいただき、改めて自己修練の必要性を感じている次第です。

今年一年で修行大師の像や四国八十八カ所霊場の踏み石、石段の整備、大わらじの復活など、当寺院も見違えるほど立派にさせていただきました。私も、このお寺にふさわしい住職として皆様に認めていただけるよう、これから精進して参りたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

合掌

平成22年10月吉日

宝幢院 住職(第40世) 大畠 博道



本堂：文化4年(1807)、大師堂：文化2年(1805)に上棟



客殿(平成21年・屋根瓦修復)



鐘楼堂〔故平松茂氏寄贈。釣鐘は享保21年(1736)に鑄造されたものがあつたが、第二次大戦中に供出、現在のものは昭和37年謹鑄、檀徒の戦死者名が刻まれている。〕



後鳥羽上皇記念碑(1430年頃の作)



覚正(第31世)塔
〔安政(1854-59)の頃の作〕



境内駐車場入り口を北に上った所にある宝幢院墓地。
歴代住僧の墓、永代供養墓などがある。



東京弁護士会長を勤め、中庄図書館
を寄贈した平松市蔵(1880-1944)夫妻
の墓



永代供養墓(2010年12月建立、
70基収容可能)

寺に伝わる書、額

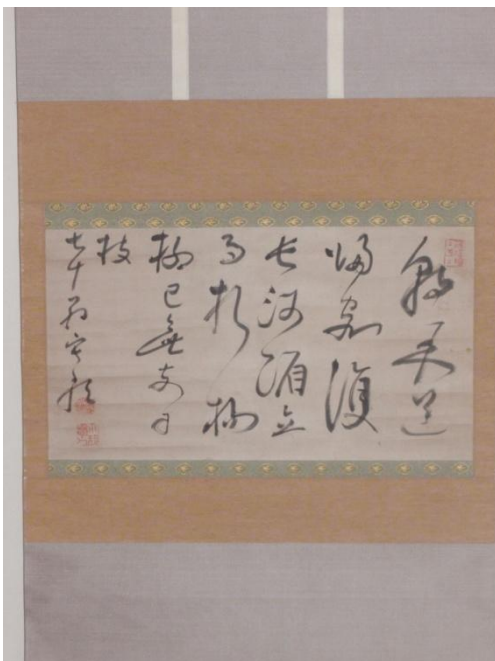
智久ノ松：開山の祖師報恩大師の偉業を讃えて第2代智久法師が植えたといわれる見事な“影向(ようこう)の松”(縁起録には“壽松”と書かれている)が境内にあった。それを画工・渡邊義彦(早島出身、明治14年51歳で没)が版木で描いた。この額はその墨絵。



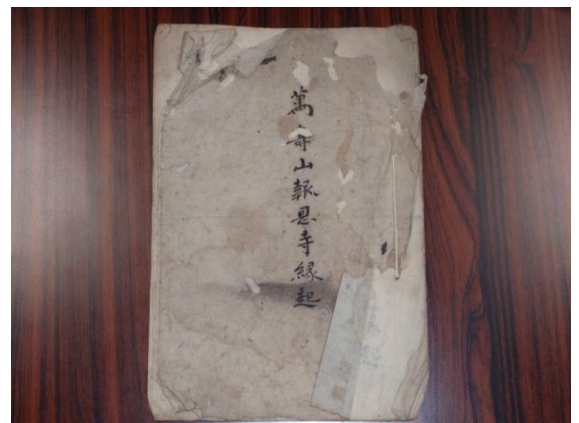
平沼騏一郎(第35代首相)の書



犬養健(犬養毅の三男、1953年
法務大臣)の書



上：寶幢院縁起原本
左：寂庵の書(故浅尾毅氏寄贈)



萬寿山 報恩寺 寶幢院 縁起要録

縁起要録原本一大正10年2月、八木新次郎、小郷勝三郎(現総代・山川基弘氏の祖父)、清田孫三郎、神崎小魯らによって寄進された。

縁起要録写し一昭和49年11月、山川基弘氏により、父宗三郎寂を記念して寄進された。

縁起要録概要

JR山陽本線中庄駅から南へ約一キロ。岡山県倉敷スポーツ公園野球場東側の丘の上に萬寿山報恩寺寶幢院がある。同寺に登る参道の階段の下には仁王門があり、表には大きなわらじが奉納されている。石段を登り境内に入ると、広い境内に本堂、大師堂、庫裡、客殿、鐘楼堂、鎮守社妙見宮の諸堂が軒を連ね、老松などの樹木との調和が素晴らしい。

寶幢院の詳しい寺歴は、過去幾度かの火災によって記録資料等が焼かれてしまったため不詳とされている。残された言い伝えなどによると、寶幢院は奈良時代に吉備地方を中心に活躍し備前四十八カ寺を建立したといわれる報恩大師によって天平勝宝年間(749-757)に開基されたと伝えられている。そのため同寺の寺号は報恩寺となっているという。

山号の「萬寿山」は、寶幢院のある周辺の平地が、萬寿年間(1024-28)に新開されて、「萬寿の庄」と呼ばれていたことから名付けられたという。また、現在の本尊は阿弥陀如来であるが、開基された時は行基菩薩作の薬師如来だったということで、報恩大師が、当時の本尊のご利益をもって万民の福寿を祈って名付けたともいわれている。

平安時代末期の寿永年間(1182-84)の頃には、源平の戦いの兵火に遭い伽藍はことごとく焼失。その後、永享年間(1429-41)に宣深僧正によって再興されている。この宣深僧正は、備前国児島の生まれで、御鳥羽天皇の皇子・桜井親王の後裔。永享年間に、万寿の庄に来錫したという。この地が現在、「鳥羽」と呼ばれているのは、宣深僧正がこの地に後鳥羽帝の塚をつくったことから名付けられたという。

同寺から、南へ数百メートル離れたところに、「加持の井」と呼ばれる井戸が残っている。この井戸の水を飲むと「諸病平癒間違い無し」と当時から信仰を集めていた。また、言い伝えによると、その昔寶幢院には五重塔が建っていたという。現在は、昔に起きた火災で焼失したためその姿はとどめないが、今でも同寺近くに「塔の前」という地名だけが現存している。

『高野山真言宗備中寺院めぐり』より

加持の井

マスカット球場駐車場南入り口より南200メートルほどの山の麓にある。帯江観音寺に至る昔の山道の上がり口。手前の四角な蓋のある方の井戸。



仁王門(山門および仁王像)

宝暦2年(1752)、国富小八郎が寄進(下の写真)、現在のものは平成元年安原治、徳太郎両氏の寄進によって建て替えられた。国富家は宇喜多氏の家臣であったが、庭瀬、鳥羽を経て早島に移住。現総代の国富良昭氏は10代目。国富宅には宝幢院にあった智久の松の子松が植えられていた(下の写真左)が、松食い虫で枯れ、その大きな株が現在も保管されている。下の写真右は国富氏とその株。





大わらじを製作中の小郷重良、猪一郎、国夫氏ら（向かって右より）。稲藁大束10束を使って、試作品2個（左後方）を含め、数ヶ月をかけて作り上げた。



平成22年11月14日、製作者と総代ら有志によって仁王門に奉納された。

歴代住僧

開基:天平勝寶年間(749-756),報恩

大師〔延暦14年(795)6月寂〕

寿永元年(1182年、後鳥羽帝の頃)

源平合戦により伽藍焼失

中興:永享年間(1429-41)に宣深

僧正により再興される。

第一世 法印宥 元

第二世 宥 光

第三世 宥 貞

第四世 宥 卯

第五世 宥 等

第六世 宥 信

第七世 宥 譽

第八世 宥 宜

第九世 宥 伯

第十世 宥 圓

第十一世 宥 長

第十二世 宥 柱

第十三世 宥 照

第十四世 宥 意

第十五世 宥 宣

第十六世 宥 觀

第十七世 宥 智

第十八世 宥 政

第十九世 増 海

第二十世 増 鏡

第二十一世 増 深

〔寛永三丙寅年(1626)6月26日寂〕

第二十二世 増 宥

〔寛文九己酉年(1669)9月11日寂〕

第二十三世 良 正

〔元禄九丙子年(1696)9月1日寂〕

第二十四世 宥 正

〔延享四丁卯年(1747)9月25日寂〕

第二十五世 知 良

第二十六世 宥 弘

〔天明三壬寅年(1782)11月7日

寂〕

第二十七世 覺 遷

〔寛政三辛亥年(1791)5月20日寂〕

第二十八世 覺 道

〔文化十癸酉年(1813)9月16日寂〕

第二十九世 覺 本

〔文化十二乙亥年(1815)9月4日寂〕

第三十世 覺 明

〔文政十三庚寅年(1830)3月19日寂〕

第三十一世 覺 正

〔嘉永六丑年(1853)8月23日寂〕

第三十二世 覺 知

第三十三世 覺 成

第三十四世 密 如

第三十五世 密 眼

〔明治十四辛巳年(1881)旧8月23日寂〕

第三十六世 真 梁

第三十七世 恵 峯

〔大正9年(1920)3月13日寂、54歳〕

第三十八世 大畠教恵

〔昭和25年(1950)3月13日寂、59歳〕

第三十九世 大畠晋道

〔昭和9年7月12日生〜〕

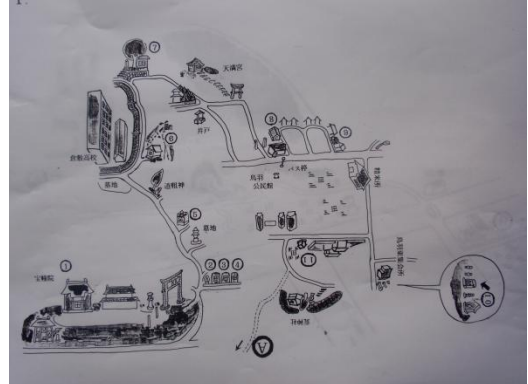
第四十世 大畠博道

〔昭和43年2月9日生〜〕

寛政四国巡礼

中庄、早島にある本尊様と御大師様を祀った御堂八十八箇所を巡拝する行事。毎年5月頃と11月頃に檀徒有志によって行われる。寛政年間(1789-1800)に始まったとされ、全行程が約13キロで四国八十八ヶ所巡りのミニ版である。一時途絶えていたが、平成になって再開された。最近では20-30人が参加しており、御堂近くの人々により順路も清掃され、茶菓の接待もあり、充実した行事となっている。順路は宝幢院を起点にして鳥羽一仁部一早島(金田)一黒崎、大寺(西の院、性徳院)一別府一中島一中田一辻一吉田の順となっている。中庄同行会(西の院内)の清水隆玄氏の作画による「寛政四国八十八ヶ所霊場 巡拝遍路道中案内図」が作られている(写真右はその1頁目)。

写真左:2番極楽寺、3番金泉寺、4番大日寺の本尊様と御大師様を祀った御堂



正御影供(しょうみえく、俗称“めいく”)

宗祖弘法大師は、承和2年(835年)3月21日にご入定されました。真言宗では、大師の恩恵への感謝を表すために御影(みえい)＝(おすがた)をかざり、生身の大師として法要を行います。正御影供では、霊供膳(りょうぐぜん)や精進供(しょうじんく)をお供えし、報恩謝徳の意をこめて読経をいたします。すなわち、弘法大師の年に一度の法要で、この周辺の結集9寺院が持ち回りでを行っているため、9年に一度めぐってきます。**結集9寺院**：西の院(中庄、大寺)、東雲院(生坂)、利生院(二子)、蓮休寺(栗坂)、観音寺(中帯江)、千光寺(早島)、薬師院(早島)、安養院(早島)、宝幢院(鳥羽)。

写真は前回の正御影供(平成14年4月28日)の稚児行列の一コマです。行列はだいたい以下の人員からなっています。引頭会奉行、花娘(供養妃)、壇家世話人・総代代表、参加寺院の住職、稚児と両親家族、のぼり、天蓋持ち(世話人)、一般檀徒、写真係、交通整理班。

